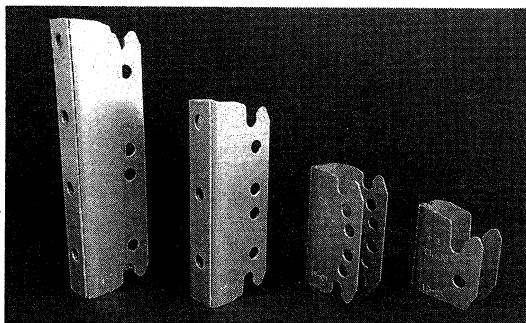


発行所 日刊木材新聞社
〒135-0023 東京都江東区
平野3-2-6木場パークビル3階
編集・営業 ☎03-3820-3500
FAX03-3820-3519
総務・販売 ☎03-3820-3511
FAX03-3820-3518
https://jfpj.co.jp/
eメール info@n-mokuzai.com
購読料 1ヵ月 6,200円
©日刊木材新聞社 2019
本紙の無断複製(コピー・PDF)配布
は、著作権の侵害にあたり違法です。

「テックワンTCW」年内投入

タツミと日本製鉄



コンパクトでありながら耐力向上を図った。
右からテックワンTCW-10、18、24、33

コンパクトで耐力向上

タツミ(新潟県見附市、山口紳一郎社長)と日本製鉄(東京都、橋本英一社長)は、金物工法シェアNo.1のテックワンの進化形「テックワンTCW」を共同開発し、年内に発売する。従来と比べコンパクトでありながら耐力の向上を実現しており、より広範囲な木造建築物への適用を目指していく。加工仕様に大きな変更はなく、既存のプレカックト加工機で対応可能。

両社は2015年6月の開発を進めてきた。月にプロシエクトチームを立ち上げ、新金物発生する応力を分析のうへ、耐力試験を実施し、接合金物として最適な素材と形状を提案した。タツミはこの提案に加え、長年培ってきた金物工法のノウハウと製造技術を融合させることで

今までにない新たな接合金物を完成させた。金物の素材には、よりばらつきを抑えた40OMPa鋼(スーパードライマ)が用いられており、素材から吟味した接合金物は国内初という。新金物は、シンメトリーな2個のL型金物を柱接合面で重ね合わせ構成される。これまでの解析や試験から、最も発生応力が生じる箇所はボルト穴がある背板部で、それに比較してドリフトピン

が掛かる羽部は応力が低いことが分かった。これらから、テックワンより背板部を厚く、羽部を薄くすることで接合部における重要部分と過剰部分の最適化が図られ、さらに特殊なカシメ技術により2つの金物を接合することで、金物の耐力アップとコンパクト化が同時に実現できた。ドリフトピンの位置も見直し、応力伝達がよりスムーズに行えるように最適化を図っている。

羽部の板厚はテックワンの3・2ミリに対し、2・3ミリの薄手化を実現した。背板部の板厚はその2枚重ねの4・6ミリとなる。羽部の出幅はテックワンの100ミリに対し73ミリに小型化した。金物の幅はテックワン同様の40ミリで加工仕様に大きな変更はなく、CADも

簡単な改修で対応できる。新金物はテックワンTCW-10、18、24、33の4品目。テックワンと比べそれぞれ100〜490ミリの軽量化

を実現した。既に金型は完成するなど量産化に向けて準備を進めており、年内に順次出荷できる見通しとなっている。タツミは、非住宅に対応できる「テックワンP3+」、木造平行弦トラス「パクトビーム」等とともに、今回の新金物をラインアップに加え、一層の木造建築物合理化促進に貢献していく方針だ。